

和田幸子先生の思い出

著者	村田 邦夫
雑誌名	神戸外大論叢
巻	56
号	1
ページ	1-2
発行年	2005-09-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00000916/



和田幸子先生の思い出

村 田 邦 夫

和田幸子先生が今年の3月に退職されてもう5ヶ月が過ぎようとしている。本当にあっという間のことである。和田先生を九州の八幡に割愛のために、当時の学長の須藤 淳先生と一緒に伺ってから先生の退職に至る間も、これまたあっという間であった。未だに忘れられないのは、八幡の駅前で、先生、須藤先生と少し遅めの昼食をともに頂いたことである。たしかその日はどこも閉まっているようで、それではこの次にでもという雰囲気になんとなっていく中で、和田先生は一人前を見て何とかの思いで店を探し続けていたようであった。そして「ああ、あそこ開いてますね」というなり、そこに入るようわれわれを促された。そして「ああ、良かった。折角、遠路はるばるのところをおこしいただいたのだから」と、ほっとした表情で微笑まれたのが、まるで昨日のようである。それにしても、あの昼食の中華蕎麦は忘れがたい味であった。

それにしても先生は外大の特殊な環境にある国際関係学科を先生なりに上手く舵取りされていたと思うのである。実際に、学科の責任者となってはじめてそのことを身にしみる今日この頃である。もっと先生の立場に立って考え、行動できたのではないかと思うのだが、今となっては遅すぎる。ただし、先生は、タフであった。特にその精神的逞しさは見習うべきものである。物事に拘泥しないで、いつもあっけらかんとされていた。もちろん、そうした物腰の背後にはいつも繊細さがバランスよく配置されていた。それは私などと比較しては失礼なほどに、育ちのよさをうかがわせるものであった。

先生にはぜひともここで謝っておかねばならないことがある。先生は、外大の博士課程の大学院をつくるうえで必要なマル号教授としておこし頂いたのに、在職時の年齢が1年満たないとの理由で名誉教授の肩書きを得られなかったのだが、おそらく、教授会のメンバーはそのことを知らない人が多かったであろう。私が、そのことを教授会で言うべきであったと後悔している。規定では、たとえ年数が満たない場合でも、例外的に、それを踏まえてもなお名誉教授としてふさわしい場合の条項があるからである。それゆえ、学科代表としての私の責任は大きかった。何故、教授会で発言しなかったのか、今も時々反省しているのだが、後の祭りである。まさか学科の代表がそのような条項の有無を知らなかったではすまされないだろうに。和田先生、この場をお借りして、誤ります。ごめんなさい。ただ今は、先生が次の職場でいつものように研究と教育に取り組まれますことをお祈りするばかりです。